いつかの父娘（おやこ）

かみたにりき

人物

藤代あやめ（16）高校一年生

藤代　薫（46）その父

藤代咲絵（40）その母

鏡　蘭子（33）「ノスタルジア」代表

月瀬エマ（6）劇団「くじら」所属の子役

宮台　祐（30）藤代の部下

漆原真也（44）あやめのパパ活相手

優梨（16）あやめの友人

しづ江（57）近所の主婦

同級生1

女性社員

美容師

○藤代家・外観（夜）

二階建ての一軒家。

○同・書斎（夜）

時計の針は午前一時過ぎを指す。

薄暗い室内に漏れるテレビの灯り。

画面には藤代あやめ（６）と藤代　薫（３６）が水鉄砲で楽しくじゃれ合う映像が映っている。

藤代（４６）、眼鏡にスウェットでソファに座り、映像を見ている。

藤代は腹が出ており、一般的な中年体型。

藤代、映像を見て時折顔を綻ばせる。

○藤代家・洗面所（朝）

ワイシャツ姿の藤代、鏡に映る自分の薄くなった頭頂部に溜息を漏らす。

○同・ダイニングキッチン（朝）

藤代咲絵（４０）、冷蔵庫から塩サケの切り身パックを取り出し、

咲絵「あら、嫌だわ。賞味期限が五日も過ぎてるじゃない」

咲絵、パックを開け、匂いを嗅ぐ。

咲絵「うん！　パパならまだいける」

と、頷く。

制服姿のあやめ（１６）、キッチンテーブルでパンの朝食を取っている。

藤代の声「うぇっ！」

と、洗面所から餌付く声が何度も漏れ聞こえてくる。

あやめ、食べる気が失せ、トーストを皿に戻す。

藤代、入って来て、

あやめ「（立ち上がり）ごちそう様」

と、鞄を肩に掛け、出て行こうとする

藤代「（すれ違いざまに）もう行くのか」

あやめ、顔を背け出て行く。

藤代、溜息を漏らし、キッチンテーブルの前に腰を下ろす。

咲絵、焼いた塩サケの切り身（賞味期限切れの）を、藤代の前に置く。

○×××高校・教室

あやめ、優梨（16）と同級生1が雑談中。

あやめ「父親って何であんなに臭くて汚いんだろ。存在がマジ、意味わかんないんだけど」

同級生1「そう？　ウチはパパと仲いいから　そんな風に思ったことないけどな」

あやめ「マジ？！　私はあの人と仲良くなんて絶対無理」

優梨「そういうけどアンタ、パパ活してんじゃん。それ、おかしくない？」

あやめ「あっちのパパはイケメンで爽やかだし、それに欲しいもの何でも買ってくれるからいいの」

失笑の優梨と同級生1。

○菊丸商事・営業課

スマホを覗く宮台　拓（３０）を、数人の社員が囲んでいる。

女性社員「わあ、かわいい。女の子ですか？」

と、画面には生後間もない乳児の写真

宮台「（顔を緩ませ）そう。娘はやっぱ可愛いわ」

藤代、コンビニ袋を手に入ってきて、通り過ぎ際に、

藤代「（ボソッと）可愛いのは今だけだぞ」

と、自分のデスクに腰を下ろす。

宮台「（藤代に歩み寄り）そのトゲのある言い方、どうかと思うな」

藤代、親子丼の容器の蓋を外し、

藤代「その内、ウザイだの、臭いだのって忌

み嫌われる時が来るぞ。ウチのも小さい時は『パパ、パパ』っていつも俺から離れなかったのに、今じゃ真面に口も聞かん」

宮台「もしかして、課長。自分が娘さんから嫌われてるからって僻んでんじゃ」

藤代「（悲し気に）だったら悪いか……」

と、スプーンですくった親子丼に執拗に息を吹きかける。

宮台「課長……」

藤代「あちっ！」

と、口に入れた親子丼を吐きだす。

○藤代家・トイレ～玄関（夜）

トイレの扉の向うから水を流す音。

扉が開き、スマホ片手にあやめが出て

くる。

帰宅した藤代、上がり框に腰を下ろし、革靴を脱ぐ途中。

藤代「（トイレから出てきたあやめに）ただいま」

あやめ「……」

と、靴箱の上に置いてある消臭スプレーを手に取り、藤代に吹きかける。

藤代「こら、やめないか！」

と、抵抗する藤代に吹きかけ続けるあやめ。

あやめ「（吹きかけるのを止め）マジ臭い……」

と、踵を返し、立ち去る。

○同・リビング（夜）

バラエティ番組が流れるテレビ。

あやめ、ソファに腰掛け、テレビには目もくれずスマホを操作中。

漆原からの『明日、仕事終わりに食事でもどう？』というラインメッセージに、『いいよ』と返信するあやめ。

風呂上がりの藤代、パンツ一丁で、

藤代「いやあ、さっぱりした」

と、入って来る。

贅肉が付き弛んだ藤代の腹。

あやめ「最低」

と、軽蔑した眼差しを藤代に向け、部屋を出て行く。

○菊丸商事・屋上

藤代と宮台、灰皿の前で美味そうに煙草を燻らす。

藤代「娘が俺を見るあの目、まるで汚物でも見るような目だ」

と、灰皿の中で煙草を揉み消す。

藤代「小さい時は本当に可愛かったのによ。もうあの頃には戻れんのかな」

宮台「あ、そうだ。その願い、叶います」

藤代「えっ？」

宮台「（スマホを取り出し）これ」

と、スマホの画面を藤代に見せる。

藤代、眼鏡を上げ、スマホ画面を食い入るように見る。

○×××駅・入口（夕）

あやめ、スマホに目を落とし、佇む。

清楚な服装で大人びた印象だ。

漆原の声「お待たせ」

と、引き締まった体形に格好よくスーツを着こなす漆原真也（44）が現れる。年より若く見える。

あやめ、漆原に駆け寄り、漆原と腕を組みながら歩き出す。

○藤代家・外観（朝）

T・数日後。

○同・洗面所（朝）

藤代、鏡の前で鼻唄交じり鼻毛を抜く

同時に、大きなくしゃみをする藤代。

あやめ、入ってきて、

あやめ「邪魔」

藤代「あ、すまん」

と、鼻唄を口ずさみ、楽しそうに出て行く。

あやめ、首を傾げる。

○×××高校・教室

あやめ、同級生と雑談中。

優梨、入って来て、

優梨「あやめ、ちょっと」

あやめ「何よ」

優梨「いいから、来て」

と、あやめの手を引き、教室を出て行

く。

○同・校舎裏・廃材置き場

あやめと優梨、向き合い、

優梨「最近おじさん、どう？」

あやめ「どうって？　何よ、急に」

優梨「いいから。これまでと行動が変とか」

あやめ「そう言えば、最近やたらと身だしなみに気を遣うようになった気が。それにやけに楽しそうっていうか、帰りが遅い時があるわ」

優梨「やっぱり」

あやめ「？」

優梨「あやめ、落ち着いて聞いてね。あんたのおじさん、不倫してる。私、見ちゃった

の」

と、真顔の優梨を見て、吹き出すあや
め。

あやめ「（笑いながら）ない、ない。それだ
けはマジでない」

優梨「これでも？」

と、スマホの画面をあやめに見せる。

画面には藤代と女性、それに幼い女の
子が楽しそうにファミレスで食事する
姿が映っている。

あやめの顔から笑いが消える。

○藤代家・ダイニングキッチン（夜）

あやめ、藤代、咲絵がキッチンテーブ
ルで会話もなく食事を取っている。

湯気の立つカキフライに執拗に息を吹きかけ冷ます藤代。

あやめ、そんな藤代をジッと見る。

藤代「（あやめの視線に気づき）なんだ？」

あやめ「べ、別に」

と、慌てて視線を逸らす。

藤代「（咲絵に向き直り）そうだ。今度の日曜日、一日出かけるから」

あやめ、ハッとして咲絵を見る。

咲絵「最近よく出かけるわね」

藤代「うん？　その、大学の頃の連れと久々に集まることとなってな。帰りは夜になる」

と、カキフライを口に放り込む。

藤代「あっちぃ！」

と、カキフライを吐きだす。

咲絵「もう、汚いわね！」

と、汚れた藤代の胸元を布巾で拭く。

あやめ、訝し気に藤代を見る。

○藤代家・玄関先～道路（朝）

T・日曜日。

藤代の声「じゃ、行ってくる」

と、家から出てくる藤代。

×　×

×

藤代、足取り軽く住宅街の道路を進む

その後方から、サングラスをかけたあやめが距離を取りながら進む。

○ショッピングモール・エントランス

藤代、頻りに周囲を見渡し立つ。

×

×

×

あやめ、柱の陰から腕時計に目を落とす藤代を窺う。

鏡　蘭子（３３）と月瀬エマ（６）が手を繋ぎ、藤代の元にやって来る。

藤代、エマと手を繋ぎ、三人仲良く歩き出す。

あやめ、三人の後に続く。

○同・レストラン

藤代、蘭子たちと楽しそうに食事を取っている。

×

×

×

あやめ、離れた席から身を屈め、藤代たちの様子を窺う。

サングラスをかけ、先程から不審な動きを繰り返すあやめを訝し気にみる周囲の客。

あやめ、楽しそうに笑う藤代をジッと見る。

男児の声「お姉ちゃん、なにやってんの？」

と、男児（５）不思議そうな目で、あやめを見ている。

あやめ「（小声で）いいからあっち行って」

と、手で男児を追い払う。

男児「（大声で）ママ！　此処に変なお姉：：」

×　×　×

藤代、男児の声に振り返る。

が、そこにあやめと男児の姿はない。

首を傾げる藤代。

×　×　×

あやめ、テーブルの下に隠れ、男児の口を必死に手で押さえる。

○同・ゲームセンター

アーケード台を見て回る藤代たち。

あやめ、距離を取り、藤代たちをつける。

エマ「これがいい」

と、クレーンゲームに駆け寄る。

藤代「（腕まくりし）よし、任せろ！」

と、華麗にクレーンを操作し、変なゆるキャラのぬいぐるみを穴に落とす。

藤代、ぬいぐるみをエマに手渡し、

エマ「パパ、ありがと」

蘭子「エマ、よかったね。パパ、すごいね」

照れる藤代。

アーケード台の陰から、

あやめ「（驚きの表情を浮かべ）パパ？！」

○河川敷（夕）

あやめ、土手に腰を下ろし、

あやめ「パパって……ことは、私はあの子のお姉ちゃん？」

あやめ、首を強く横に振り、

あやめ「無理無理。そんなのマジで無理！」

あやめ、河川敷で遊ぶ父と娘に目をやる。

あやめ、立ち上がると、傍の小石を拾

い上げる。

小石を強く握りしめ、

あやめ「いい年して外で女作って、その上子供まで作ってんじゃねえよ、クソ親父！！」

と、川面に向かって小石を投げ込む。

ラインの着信を知らせる音。

漆原から『次、いつ会える？』というラインメッセージを見詰めるあやめ。

○藤代家・脱衣所（夕）

咲絵、洗濯機に便座カバーとマットレスを放り込む。

黙ったまま立ち尽くすあやめに気づき

咲絵「びっくりした！　帰ってるなら、ただいまぐらい言いなさい」

あやめ「（元気なく）ただいま……」

と、立ち去りかけ、立ち止まる。

あやめ「（振り返り）ねえ、ママ」

咲絵「（手を動かしながら）何？」

あやめ「もしだよ。もしも、薫が浮気してたらどうする？」

咲絵「（吹き出し）何よ、急に？　パパに限ってそんなことある訳ないでしょ」

あやめ「分かんないよ。薫だって男だし」

咲絵「その薫って言うのやめなさいって言ってるでしょ。もし、してたとしてよ。その原因はあやめ、あんたにあるわね」

あやめ「何でよ？」

咲絵「あんたがパパのこと汚い、臭いだの言って邪険にするから、それで家が面白くな

くなったのかもね」

あやめ「そういうママだって、薫を寝室から締め出して書斎に寝かせてるじゃん」

咲絵「それはお父さんの鼾が酷いから仕方なくよ。兎に角、そうならないように少しは優しくしてあげなさいよ」

あやめ「……」

咲絵、便座カバーの入った洗濯槽に藤代の下着を放り込み、スタートボタンを押す。

○藤代家・リビング（朝）

制服姿のあやめ、戸口の柱を見詰める朝刊を持った藤代が姿を見せると、あやめ、慌てて通学鞄を肩に掛け、部屋

を出て行く。

首を傾げる藤代。

○公園

T・日曜日。

エマの乗るブランコを押す藤代。

楽しそうな藤代とエマ。

傍のベンチに腰掛け、二人を笑顔で見守る蘭子。

×　×

×

茂みに隠れ、藤代たちを窺うあやめ。

○路上

エマが歩いている。

その後を蘭子が距離を空けて続く。

二人の前にあやめが立ちはだかる。

○雑居ビル・「ノスタルジア」事務所

部屋中に幅広い年齢層の男女の宣材写真が飾られている。

テーブルを挟み、はす向かいで座るあやめとエマ。

落ち着かない様子のあやめに対し、落ち着き払ってスマホを弄るエマ。

蘭子、あやめに茶を出し、正面に座り

蘭子「改めて自己紹介させていただきます。私、ノスタルジア代表兼女優の鏡　蘭子と申します」

と、名刺をあやめに差し出す。

名刺には『理想の家族を実現する会社

ノスタルジア㈱』とある。

蘭子「先ほど説明致しました通り、独り身の方や、現在家庭に居場所のない方を対象にお客様の望みにあった理想の家族を提供し疑似体験出来るというのがわが社のコンセプトでして、また……」

あやめ「（蘭子の話を遮り）ふっ、家庭に居場所がないね……」

蘭子「これは大変失礼しました。しかし、残念ながらお父様が現在そう強く感じておられるのも事実でして」

あやめ「話、続けて下さい」

蘭子「あ、はい。私共の最大の売りは私を含めスタッフ全員がプロの役者という点ですこの子も現在、老舗の子供劇団『くじら』

に在籍中で、ウチで一番人気の子役です」

と、エマに目をやる。

壁の一番目立つところにエマの宣材写真が飾ってある。

スマホに目を落としたままのエマ。

蘭子「（あやめに向き直り）ですので、決して浮気などということではございません」

エマ、スマホをテーブルに置き、

エマ「（あやめに）ねえ、あのオジサンの臭い、何とかならない？」

あやめ「えっ？」

エマ「抱っこされる度に、こっちは臭くて仕方ないんだけど。まあ、一応プロだから我慢はしてるけどさ」

あやめ、エマに愛想笑いを向ける。

○橋の上（夕）

欄干に寄りかかり、スマホを見詰めるあやめ。

画面には『貴方の本当の居場所は此処にある』というキャッチコピーと共に笑顔の蘭子が映るノスタルジアのWEBページ。

あやめ、スマホを持つ手に力が入る。

○藤代家・リビング（夕）

部屋には西日が射しこんでいる。

あやめ、戸口の柱の前で一人佇む。

×　×　×

（フラッシュ）

背筋を張り、柱に背を付けるあやめ（

6）

藤代（36）、あやめの頭頂部に定規をあて、マジックで柱に横線を引くと『あやめ六歳四か月』と書き込む。

藤代「また伸びたな」

と、笑顔を浮かべる藤代とあやめ。

×　×

×　×

あやめ、マジックで何本も横に引かれた柱の線に指で触れる。

○自宅近くのゴミ捨て場（朝）

ゴミ捨て場周辺の掃き掃除をするしづ江（57）。

そこへ、スーツ姿の藤代、ゴミ袋片手にやって来て、

藤代「（しづ江に）お早うございます」

と、ゴミステーションの扉を開け、中にゴミ袋を放り投げる。

しづ江「（掃き掃除の手を止め）ちょっと、ちょっと」

と、藤代の傍に寄ると、

しづ江「こんな事言うの気が引けるんだけどね。見ちゃったのよ、私。あやめちゃんが男の人と……」

藤代の顔が曇る。

○菊丸商事・屋上

藤代と宮台、ベンチで向き合い、

宮台「パパ活？！」

周りにいた人々が一斉に藤代たちを振

り返る。

藤代「（声を押し殺し）声が大きい」

宮台「すみません。で、課長がパパ活を？」

藤代「違う！　その……知り合いが自分の娘がパパ活してるんじゃないかって悩んでてな。相談を受けたんだ」

宮台「ふーん」

藤代「俺はパパ活ってのがよく分からんのだが、一体どんなことをするんだ？」

宮台「おっさんと食事やデートをして、その対価としてお金を貰うみたいな」

藤代「ホントにそれだけか？　所謂その……何ていうかそういう」

宮台「そういう？」

藤代「だからその……金銭と引き換えにだ

な…… 肉体関係をもつことがあったりするんじゃないのか」

宮台「ああ。それは女の子によるんじゃないっすかね。中にはそういう子もいるでしょうけど、大半はそういうのNGにしてる子が多いって聞きますよ」

藤代「（宮台の胸倉を掴み）嘘じゃないだろうな、それは！ ええ、どうなんだ？！」

宮台「ど、どうしたんです？ やけに課長が興奮して、知り合いの娘さんのことでしょ？」

藤代「あ、ああ……」

と、宮台の胸倉から手を放す。

宮台「びっくりしたな。（襟元を直し）でも親は自分の娘を信じてやるしかないんじゃ

ないっすかね」

藤代「ああ……」

と、視線を落とす。

○藤代家・ダイニングキッチン（夜）

あやめ、藤代、咲絵がキッチンテーブルで会話もなく夕食を取っている。

藤代、先程から食べる手を止め、あやめの顔をジッと見ている。

あやめ「何？　さっきからジロジロ」

藤代「いや、別に」

と、気まずそうに箸を動かす。

あやめ「ごちそう様」

と、立ち上がり、出て行く。

あやめ、ビニール袋を手に戻ってきて

あやめ「（藤代に袋を差し出し）これ」

藤代「一体何だ？」

あやめ「いいから、ほら。臭いと女の子から嫌われるわよ」

と、藤代に袋を押し付け、再び出て行く。

藤代、袋から中身を取り出す。

中身は体臭予防のサプリやボディクリームだ。

藤代、咲絵と訝し気に顔を見合わせる

〇ヘアサロン・中

T・日曜日。

スタイリングチェアに座る藤代。

その背後で、あやめが美容師に、

あやめ「（藤代の頭を指しながら）てっぺんが大分薄いんで分からないようにボリューム感がでる髪型にしてほしいんですけど」

美容師「ソフトモヒカンとかは？」

あやめ「じゃ、それで」

×

×

×

美容師、ハサミを動かしながら、

美容師「（藤代に）いい娘さんですね」

藤代「（愛想笑いを浮かべ）まあ」

×

×

×

待合のソファに座り、雑誌に目を通すあやめ。

ラインの着信音が鳴り、『頼む。お願いだからもう一度会ってくれないか』

という漆原からのラインが届く。

あやめ、ラインメッセージを暫く見詰めるが、スマホをテーブルに伏せると再び雑誌に目を戻す。

○セレクトショップ・中

紳士服売り場で服を選ぶあやめと藤代

あやめ、藤代が選んだ地味目な服を奪い取ると、

あやめ「こっちの方が絶対いいって」

と、明るい色の服を藤代に渡す。

○喫茶店・中

窓際の席に対面で座るあやめと藤代。

藤代「（珈琲を一口飲み終え）一体どういった風の吹き回しだ？

あれ程パパの事、嫌

ってたのに」

あやめ「別に……」

藤代「ひょっとして、何か後ろめたいことでもあるんじゃないのか」

あやめ「それどういう意味よ」

藤代「（一呼吸置き）あやめ、お前パパ活してるらしいな。金貰って男を喜ばせるようなことして恥ずかしくないのか。まるで商売女じゃないか」

あやめ「はっ？！　何それ。言っとくけど、私お金貰ってその人と一回だってヤッてないから！！　好きでもない男とそういうことするほど軽くないよ、私！」

他の客たちが一斉にあやめを見る。

藤代「（声を殺し）あやめ、落ち着け。何も

そんな事言ってないだろ」

あやめ「何よ、自分だってお金で作り物の家族に逃げてるくせに！」

藤代「（驚いた様子で）あやめ、お前……」

あやめ、気まずそうに顔を背け、店から駆け出て行く。

○自宅近くの公園・側道

藤代、肩を落としてトボトボと歩く。

あやめの声「放して！！」

藤代、公園の中に目をやると、あやめと漆原が揉めている。

○同・中

漆原、あやめの腕を掴み、

漆原「何で避けるんだよ。連絡しても全然返事くれないし、急にどうしたんだ？！」

あやめ「別に何もないわよ。只こういうのに飽きただけ。もういいでしょ、放して！」

と、漆原の手を振り払う。

漆原「飽きたって……ふざけんなよ！　こっちは散々欲しいもの買ってやって、飯も食わしてやったのによ」

あやめ「何それ？　ホント小っちゃい男」

漆原「何だと！！」

と、あやめの腕を乱暴に掴み、自分の方に引き寄せる。

あやめ「（抵抗し）痛いっ！　放してよ」

と、横から漆原の腕を掴む男の手。

振り返ると、藤代が眉間に皺を寄せ、

藤代「若い女の子が嫌がってるじゃないか。あんたもいい年して恥ずかしくないのか」

漆原「はあ？　あんたに関係ないだろ」

藤代「それが大いに関係あるんだよ、こっちは！！」

漆原「何、さっきから？　あんた、誰？」

藤代「実のパパです！」

漆原「えっ？」

と、あやめを振り返る。

あやめ「（驚いた顔で）パパ……」

藤代「（顔を漆原に至近距離まで近づけ）ウチの娘が何か粗相を働きましたでしょうか？」

漆原「あ、いえ……失礼しました」

と、慌てて駆け出していく。

藤代「（漆原の後ろ姿に向かって）今後娘に近づいてみろ、只じゃおかないからな！」

あやめ、立ち尽くし藤代を見る。

○「ノスタルジア」事務所（日替わり）

蘭子、藤代から書類を受け取り、

蘭子「ではこれで解約の手続きは完了ということで。しかし、残念ですね」

藤代「娘がどうしてもやめろと言うもんですから」

蘭子「そうですか。仕方ないですね。どうかお幸せに」

藤代、気恥ずかしそうに頭を下げる。

○藤代家・玄関

上がり框に腰を下ろし、靴を脱ぐ藤代

振り返ると、あやめが立っている。

藤代「ただいま」

あやめ、手に持っている消臭スプレーをいきなり藤代に吹きかける。

藤代「こら、やめないか」

と、あやめから消臭スプレーを奪い取ると、あやめに吹きかける。

あやめ「（逃げながら）もう止めてってば」

と、楽しそうにじゃれ合うあやめと藤代。（了）